

# 大いなる試練 1994年(平成6)、夏、大渇水

## 空梅雨と猛暑で始まった異変

1994年(平成6)、梅雨入りは平年並でしたが、梅雨明けは2週間も早く、降雨がほとんどない空梅雨で終わり、猛暑が始まりました。

この異常気象により、早明浦ダムへの流入量は急激に少なくなり、吉野川の河川流量も目に見えて減少し始めていきました。

6月20日には吉野川水系水利連絡協議会が開かれ、早明浦ダムの貯水量が50%になった時点で取水制限を行うことを確認し、6月27日、四国地方建設局は渇水対策本部を設置し、吉野川ダム統合管理事務所も渇水対策支部を設けました。



◀6月20日、吉野川水系水利連絡協議会開催



◀6月27日、渇水対策本部設置

## 6月28日、早明浦ダム渇水調節開始

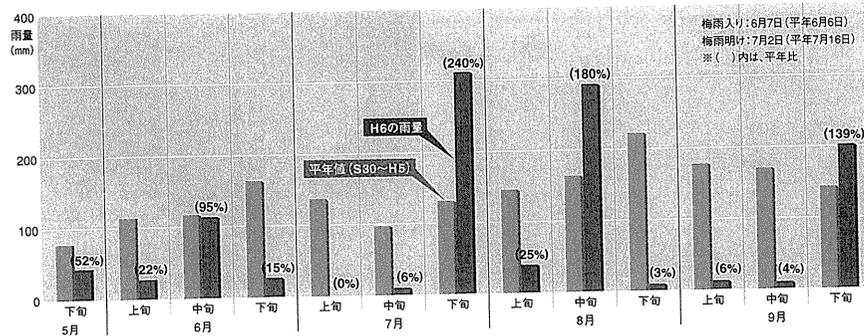
依然として旱天が続き、6月28日には早明浦ダム貯水量は51.8%になり、第1次取水制限を開始しました。徳島用水は17.5% (吉野川の既得用水分を含む率、以下同)、香川用水は30%カットされました。

その後も状況は悪化の一途をたどり、6月下旬～7月下旬の1ヵ月雨量は29mmで平年のわずか8%と、過去40年間で最も少ない記録でした。最高気温も、徳島・高松・高知市で観測記録を更新するとともに、真夏日・熱帯夜日数などで記録づくめの夏になりました。

7月4日には吉野川水系水利連絡協議会で第2次取水

制限が合意され、7月7日には早明浦ダム貯水量が32.3%になり、徳島用水は20.5%、香川用水は60%カットされました。

7月15日には早明浦ダムの貯水量が16.3%になり、第3次取水制限に突入しました。徳島用水は22.4%カットとなり、香川用水のカット率は75%におよびました。1990年(平成2)の渇水で香川用水は60%カットを経験していましたが、この年には未体験の領域が待ち構えており、高松市では1日19時間断水が始まりました。



▲早明浦ダム上流の降雨状況

## 早明浦ダム貯水率ゼロ、最大の危機が到来

渇水状況は早明浦ダムだけでなく、銅山川の柳瀬ダム・新宮ダムでも同様でした。大渇水の猛威はとどまることを知らず、新聞は「ひん死の水がめ」と報じました。

早明浦ダムでは湖底が露出し、7月24日、ついに利水容量の貯水率がゼロになりました。

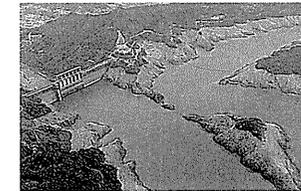
そこで、残っていた発電専用用水について、水利連絡協議会および関係機関で協議調整を重ね、徳島用水と香川用水に活用されることになりました。

幸運にも24日夜半より待望の雨が降り、台風7号と14号が相次ぎ、早明浦ダムは息を吹き返しました。

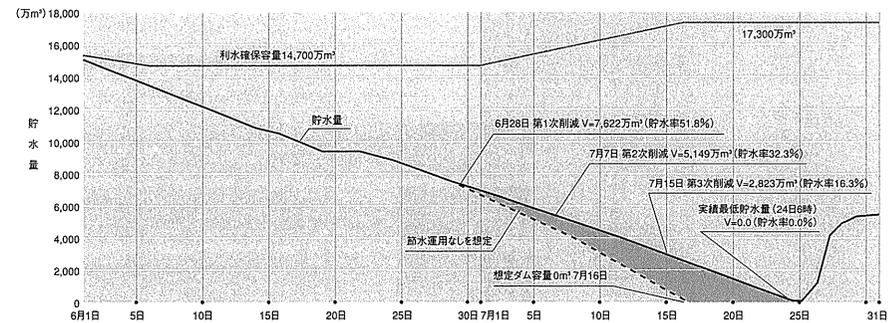
もし、早明浦ダムが渇水調節を行っていなければ8日間も

早く、7月16日時点で貯水率ゼロになっており、想像を絶する被害が広がっていたと考えられます。

また、この間には高知分水が自主的に取水を中止し、徳島・香川用水への協力があったことも忘れてはなりません。



▲渇水時の早明浦ダム



▲早明浦ダムの節水運用

## 大渇水が実証したダム効果

大幅な取水制限を受けた香川県では厳しい節水生活を余儀なくされ、特に高松市が深刻な状態になりました。

高松市では19時間断水が1ヵ月続き、給水所が37カ所に設置され、述べ12,000人を動員して給水活動を行いました。市民生活や産業活動に与えた影響は計り知れないものでした。

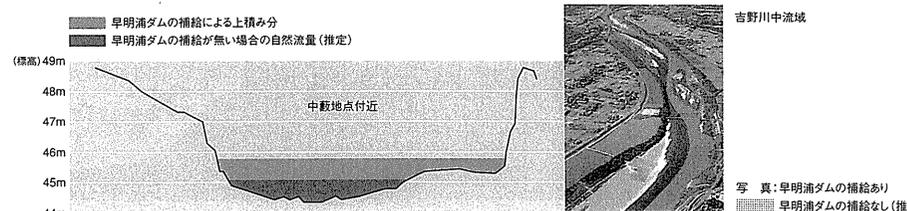
しかし、もし早明浦ダムがなかったら、高松市の生活用水は2分の1になっており、節水状況はさらに深刻なものになっていたはずだ。

また、7月24日夜半からの台風接近による降雨がなければ、吉野川の流量はさらに減少しており、河川環境はさらに悪化し、徳島県での被害も大きくなっていったと考えられます。



▲高松市では給水車が出動

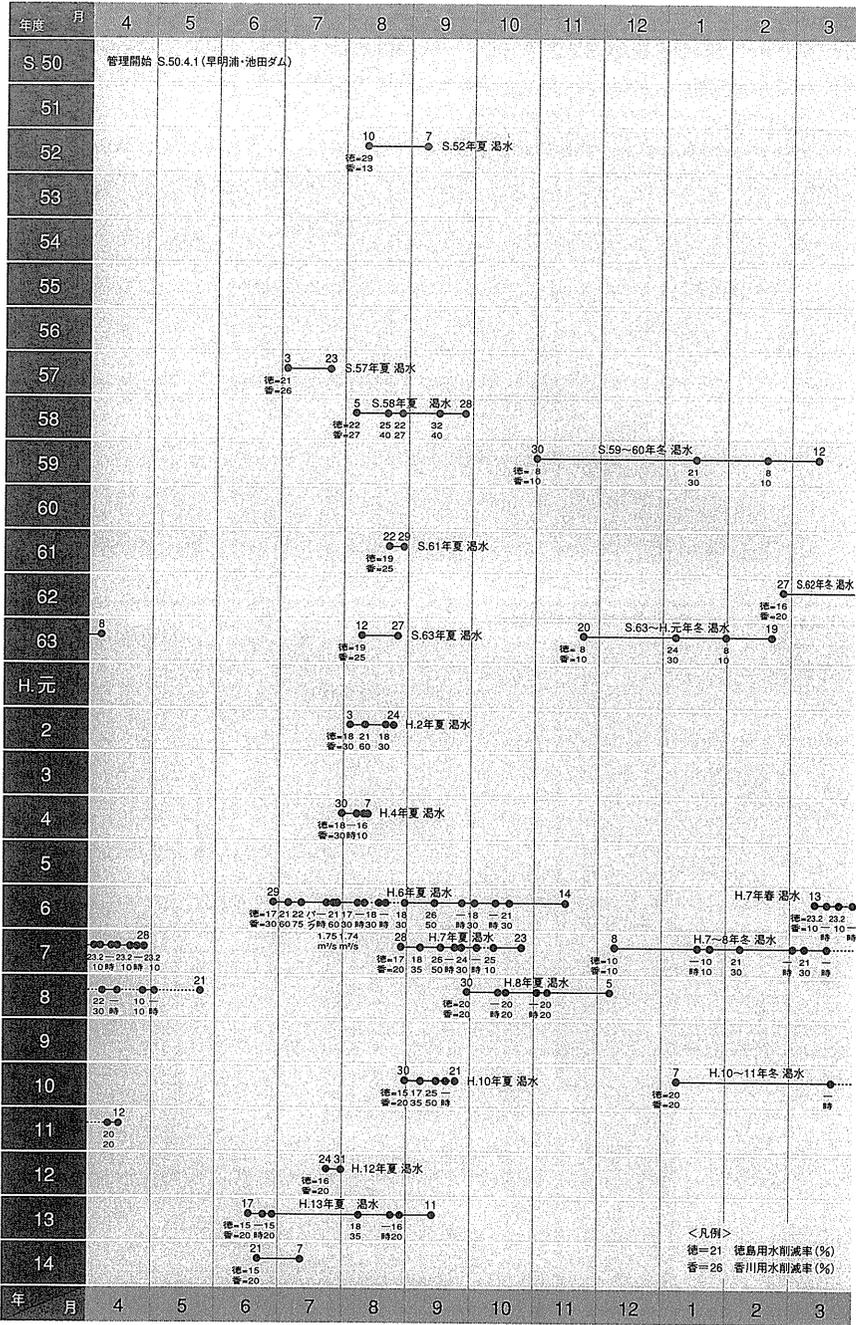
1994年(平成6)の大渇水は、肉肉なことに厳しい現実を通して、早明浦ダムを中核とする吉野川のダム群の効果を実証したといえます。



▲早明浦ダムの補給の有無による吉野川中瀬地点付近の河川状況の変化(イメージ図)

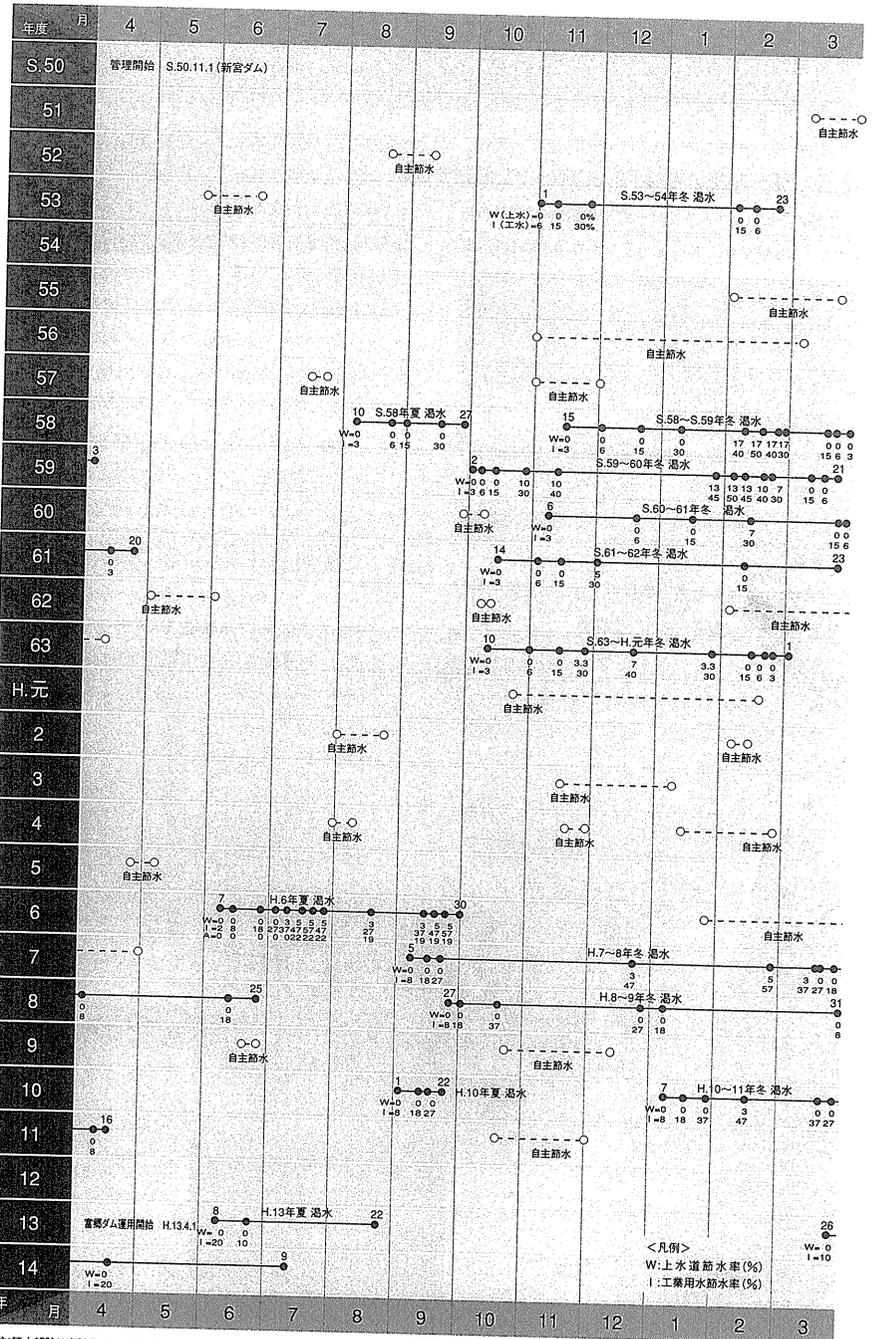
湯水対応

◎吉野川本川における取水制限



※図中の日は池田を基準とした取水削減の開始・強化・緩和・解除の日である。

◎網山川における取水制限



※注:節水解除は当該日の24時である。